

大屋敷C古墳群2

Oyashiki-C Tumuli

浜松市教育委員会

2025年3月

Hamamatsu Municipal Board of Education, March, 2025



大屋敷 C 古墳群 2

Oyashiki-C Tumuli The 3rd Excavation report

Hamamatsu Municipal Board of Education

2025



1 大塚敷C古墳群全景(南から)



2 C5号墳全景(南から)

例 言

- 1 本書は、静岡県浜松市浜名区宮口地内において実施した大屋敷C古墳群3次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、道路改良工事に先立ち実施した。現地の発掘調査作業、整理作業及び報告書刊行は、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課）が実施し、浜松市から委託を受けた株式会社アーキジオが実務を補佐した。調査にかかわる費用は、浜松市（土木部浜名土木整備事務所）が負担した。
- 3 発掘調査の面積と期間は、以下のとおりである。

調査面積 230 m²

調査期間 現地調査 令和6年（2024）8月15日～令和6年10月28日

整理作業 令和6年（2024）10月29日～令和7年（2025）3月28日

- 4 現地調査及び整理作業は、井口智博（浜松市市民部文化財課）の担当のもと、基峰修（株式会社アーキジオ）が実務を補佐し、現地調査においては伊東孝次（同）、楠原崇（同）、村本一馬（同）が、整理作業においては阿部将樹（同）、三島ゆかり（同）、片岡智（同）が作業に加わった。
- 5 本書の執筆は、第1章1～3、第3章2を井口、第2章3を三島、その他を基峰が行った。現地における写真撮影は、基峰が担当し、一部を井口が行った。無人航空機（UAV）による空中写真撮影は村本が行った。出土遺物の写真撮影は基峰が行った。本書の編集は井口が担当し、基峰が実務を補佐した。
- 6 調査にかかわる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。

凡 例

- 1 本書で用いる座標は世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 2 本書で扱う横穴式石室にかかわる用語については、第8回東海考古学フォーラム三河大会の概念規定（小幡早苗・近藤美紀 2001「横穴式石室の定義」『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム三河大会実行委員会 三河古墳研究会）を援用した。
- 3 本書で使用する古墳関連以外の遺構の略号は以下の通りである。
SP：小穴
- 4 遺物番号は遺物の種別にかかわらず連番を付した。
- 5 本書で報告する遺物の断面と種別の関係は以下の通りである。

 土師器  須恵器  灰釉陶器・中世陶器  石器

大屋敷C古墳群2

目次

巻頭図版

例言

凡例

第1章 序論	1
1 調査に至る経緯	1
2 大屋敷C古墳群をめぐる環境	2
3 大屋敷C古墳群の調査歴	4
4 調査の方法と経過	5
第2章 調査成果	7
1 墳丘及び周溝	7
2 埋葬施設	16
3 縄文時代の遺構と遺物	19
第3章 総括	21
1 発掘調査の成果	21
2 今後の展望と課題	21
出土遺物観察表	24

図版

図 版 目 次

巻頭図版

1	1	大屋敷C古墳群全景（南から）
	2	C5号墳全景（南から）
図 版		
PL. 1	1	調査前状況（東から）
PL. 1	2	表土除去後状況（東から）
PL. 2	1	墳丘トレンチ設定状況（上から）
PL. 2	2	墳丘トレンチ設定状況（南から）
PL. 3	1	墳丘中央盛土除去後：墳丘断面状況（南から）
PL. 3	2	奥壁付近倒石出土状況（西から）
PL. 4	1	北側周溝検出状況（東から）
PL. 4	2	周溝完掘状況（東から）
PL. 5	1	墳丘全景（南から）
PL. 5	2	墳丘全景（東から）
PL. 6	1	埋葬施設検出状況（上から）
PL. 6	2	埋葬施設検出状況（北西から）
PL. 7	1	羨門立柱石正面検出状況（西から）
PL. 7	2	SP01遺物出土状況（南から）
PL. 8	1	完掘状況（東から）
PL. 8	2	完掘墳丘断面（北西から）
PL. 9	1	墳丘・周溝出土遺物
PL. 9	2	SP01出土遺物
PL. 10		縄文時代出土遺物

挿 図 目 次

挿 図

Fig. 1	大屋敷C古墳群の位置	1
Fig. 2	大屋敷C古墳群及び周辺の遺跡	3
Fig. 3	大屋敷C古墳群分布図	4
Fig. 4	墳丘現況測量	6
Fig. 5	羨門立柱石検出作業	6
Fig. 6	遺構測量作業	6
Fig. 7	現地説明会	6
Fig. 8	調査前現況図	7
Fig. 9	地区割、墳丘解体・保存範囲図	8
Fig. 10	調査区全体図	9
Fig. 11	墳丘・周溝断面図（1）	10
Fig. 12	墳丘・周溝断面図（2）	11
Fig. 13	墳丘・周溝断面図（3）	12
Fig. 14	墳丘解体ライン墳丘断面図	13
Fig. 15	石室開口部墳丘・周溝断面図	14
Fig. 16	墳丘・周溝出土遺物	15
Fig. 17	石室平面・羨門立柱石正面及び側面図	17
Fig. 18	羨門立柱石下 SP01 平面・断面図	18
Fig. 19	SP01 出土遺物	18
Fig. 20	縄文時代出土遺物	20

第1章 序 論

1 調査に至る経緯

大屋敷C古墳群は、浜松市浜名区宮口に所在する古墳時代後期から終末期の群集墳である。古墳群の立地する浜名区宮口から根堅にかけての丘陵地帯には多数の古墳が分布し、その総数は350基以上に及び市内でも屈指の古墳密集地帯となっている。

浜名区宮口地内では、主要交通路である国道362号及び接続する道路の改良工事が進められて来た。大屋敷C古墳群においては、1999年から2002年にかけて、国道362号バイパス建設に伴い財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所による発掘調査が実施され、計51基の古墳を検出し、いずれも横穴式石室を主体部とする終末期の群集墳であることが確認された。当該バイパス建設工事においては、大屋敷A古墳群の発掘調査も実施され、計62基の古墳が確認されており、宮口地区における古墳時代後期から終末期の群集墳の実相が明らかになっている。

古墳群の西側では、主要地方道浜北三ヶ日線を南北に貫いているが、国道362号バイパスの開通や新東名高速道路浜松サービスエリアスマートインターチェンジの設置を契機に交通量が増加し、浜北三ヶ日線の改良が課題として顕在化して来た。このことから、2015年に地元自治会及び亀玉小・中学校より歩道整備の要望が提出され、浜北三ヶ日線道路改良工事の事業化に至った。改良工事は、亀玉中学校敷地側への拡幅が計画されたが、予定地内に墳丘が残る大屋敷C5号墳等の埋蔵文化財の取扱いが課題となった。

2022年7月に計画地内の確認調査を実施し、大屋敷C5号墳の残存を確認するとともに、古墳の保存について事業所管課である浜松市土木部浜名土木整備事務所と協議を重ねたが、設計の変更による古墳の保存は困難と判断し、工事によって影響が及ぶ部分について記録保存のための本発掘調査を2024年9月から実施することとなった。

現地発掘調査及び整理・報告刊行作業は、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、実務を浜松市から業務を受託した株式会社アーキジオが実施した。調査面積は230㎡である。

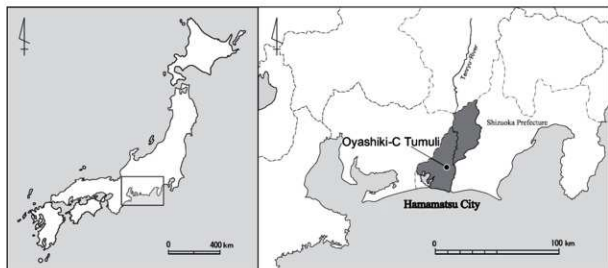


Fig. 1 大屋敷C古墳群の位置

2 大屋敷C古墳群をめぐる環境

(1) 地理的環境

大屋敷C古墳群は、浜松市浜名区に位置する。浜松市は2005年の市町村合併を経たのち、2007年の政令市移行時に7区の行政区が設置され、古墳群の所在する旧浜北区域は浜北区となったが、2024年1月1日付けの行政区再編により、浜北区は北区の一部と統合され、浜名区となった。

浜名区のうち浜北地域内の地形は、北部の山地および丘陵・三方原台地・河岸段丘・沖積平野の4つに大別できる。北部の山地および丘陵は、南アルプスの赤石山地から派生する山脈の南端にあたり丘陵を形成している。浜北地域東部に位置する三方原台地は、天竜川によって運ばれてきた砂礫（三方原礫層）が浜松累層の上に厚く堆積し、その上に赤褐色～橙褐色粘土層が堆積して形成されている。また、三方原台地東縁から浜北地域の中央部にかけては、天竜川の侵食によって形成された河岸段丘が3面形成されている。本古墳群は、三方原台地の斜面部に位置し、眼下には天竜川が形成した河岸段丘と沖積平野が広がっている。

(2) 歴史的環境

旧石器時代 岩水寺西側丘陵の根堅遺跡からは、1962・63年の発掘調査で、洞窟内からヒョウ、トラなどの動物化石とともに旧石器時代に属する2体分の人骨が発見され、浜北人と命名された。近年の分析で、下層人骨は約18,000年前、上層人骨は約14,000年前と鑑定されている。また、低位段丘に位置する堀池遺跡では、主に黒曜石製のナイフ形石器や細石刃、石核などが出土している。

縄文時代 縄文時代の遺跡は、主に丘陵の南斜面や三方原台地上に分布し、沖積平野では発見されていない。中通遺跡では、2003年から2006年に実施された発掘調査で、縄文時代草創期末～早期前葉にかけての炉穴、集石土坑が大量に発見された。大屋敷遺跡では、早期の土器が出土している他、時期は明確ではないが落とし穴状の遺構が検出されている。中期以降は遺跡数が増え、高根山遺跡、北谷遺跡、勝栗山I遺跡、梶子遺跡、富岡大谷遺跡、染地石遺跡などが存在する。北谷遺跡では、中期中葉から晩期までの土器とともに、未製品を含む多量の石器が発見され、梶子遺跡、富岡大谷遺跡、染地石遺跡では中期の竪穴建物が検出されている。

弥生時代 弥生時代において前期の遺跡は、北谷遺跡や芝本遺跡などで土器片が出土しているが、遺跡数は少ない。中期以降になると遺跡数が増え、丘陵に位置する大屋敷遺跡、高根山遺跡などの他、低位段丘の東側に大規模集落である芝本遺跡、東原遺跡が営まれる。両遺跡からは、多数の竪穴住居や方形周溝墓、土器棺墓が検出され、当該期の拠点集落と捉えられている。

古墳時代 内野地区の段丘東端に築かれた赤門上古墳は、全長56.3mの前方後円墳で、出土した三角縁神獣鏡は畿内の古墳と同範関係にあることなどから、被葬者と畿内政権との強い結びつきが認められる。中期には権現平山古墳群、神明社上古墳群、観音ツブラ古墳、辺田平古墳群などが三方原台地上に築造される一方、河岸段丘間が侵食されて形成された谷間に、二本ヶ谷積石塚群が築造される。

北部の丘陵地帯では、中期に雲岩寺B（人形山）1号墳が丘陵上に、河岸段丘上に於神社古墳などが築造され、後期に入ると、畿内系の右片袖式の横穴式石室を採用し全長35mの前方後円墳である興寛寺後古墳が河岸段丘上に築造される。後期から終末期には古墳築造の最盛期を迎え、丘陵南端部や三方原台地縁辺部にかけて大屋敷C古墳群を含めた大規模な群集墳が築造される。いずれも在来系の横穴式石室を埋葬施設に採用した小規模な円墳を主体とする古墳群であるが、切石の両袖式石室

をもつ向野古墳や、金銅透影金具が出土した涼ノ御所古墳など、規模や出土品が周辺の古墳と異なるものも認められる。古墳時代の集落については、東原遺跡で後期の堅穴建物を検出しているが、地域全体では調査例が少ないため詳細は不明である。

古代 古代において浜北地域一帯は、遠江国龜玉（あらたま）郡に属している。龜玉郡家の位置は特定されていないが、獣足付壺片の採集や立地などから、清水遺跡付近が推定地の一つとされている。北部の丘陵や台地、段丘縁辺では窯業生産が盛行し、篠場瓦窯跡では白鳳期、東ノ谷瓦窯跡では奈良時代に瓦が生産されている。平安時代から中世にかけては、灰軸陶器や山茶碗などを生産した古窯跡群が存在し、宮口古窯跡群と総称されている。その中の吉名古窯跡群では、9～10世紀の灰軸陶器を、大屋敷古窯跡群では、10世紀後半から11世紀前半頃の灰軸陶器を生産していたことが確認されている。

中世 中屋遺跡では、12世紀後半から13世紀の区画溝と土壁に囲まれた掘立建物跡が検出されており、鎌倉時代の寺院あるいは居館跡と推定されている。尾野地域には篁（たかむら）屋敷や長者屋敷が所在し、周辺には屋敷を想起させる地名や字名が多いことから、中世の居館や屋敷が複数存在していた可能性がある。根堅から宮口にかけての丘陵には中世墳墓群も多く存在し、大屋敷墳墓群のうちの1基は、円礫や河原石を敷き詰めた集石墓で、旧来の姿を保っている。

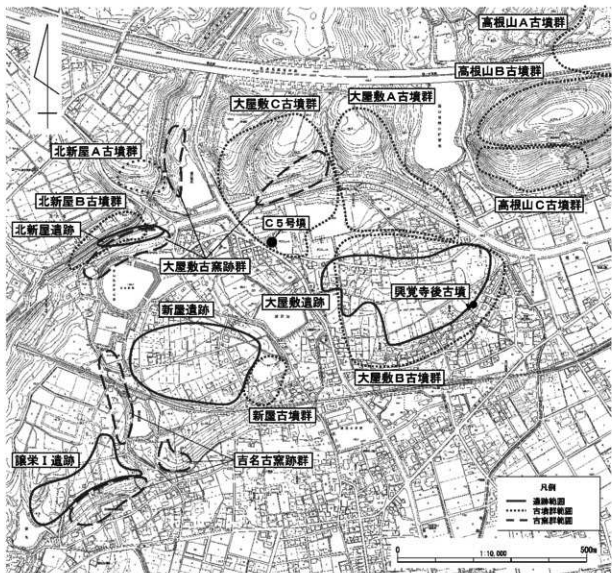


Fig.2 大屋敷C古墳群及び周辺の遺跡

3 大屋敷C古墳群の調査歴

大屋敷C古墳群では、これまでに54基の古墳の存在が確認されている。1号墳のみ丘陵の頂部付近に築かれているが、大部分は南向きの丘陵斜面に築造されている。

2000年から2003年にかけて国道362号改良工事に伴い、財団法人静岡県文化財調査研究所による本発掘調査が実施され、計51基の古墳が調査された。調査された古墳はいずれも横穴式石室を埋葬施設とし、墳丘形状の確認できるものは楕円形に近い円墳である。横穴式石室は、立柱石を有する擬似両袖式と、もたない無袖の2形態があり、前者は羨門に立柱石を有する複室系（羨門区画形）擬似両袖式と、もたない単室系（玄門区画形）擬似両袖式に区分することができる。築造の時期は、7世紀前半に築造が開始され、8世紀前半にまで築造及び追葬が行われたことが判明している。隣接する大屋敷A古墳群においても、同一の国道改良工事に伴い計62基の古墳が発掘調査され、一連の発掘調査により、浜北地区の北部丘陵地帯における群集墳の発掘調査例が一挙に増加した。



Fig. 3 大屋敷C古墳群分布図

4 調査の方法と経過

(1) 調査方法

地形測量 浜松市立龜玉中学校の校門から入って直ぐ左側、墳丘の直ぐ北側は生徒の自転車置場で、西側は隣接する自動車道路との境界に植えられた樹木、東側は生徒の通学用通路になっており、校門と自転車置き場、自動車道路、通学用通路によって囲まれた位置にC5号墳は所在していた。通学用通路に面して設置された説明板の奥に小高い墳丘が垣間見えるが、墳丘は樹木に覆われた状態になっていた。樹木の伐採後にトータルステーション（以下TSと記す）を使用して測量基準となる基準点を設置し、まずは墳丘の地形測量を優先して実施した。TSと電子平板を使用して10cmを基準に実施した墳丘測量の結果、北側の墳丘裾部は緩やかで、墳丘裾部東側から南側・西側では傾斜がきつく、南東側に置かれていた石室使用石材と推定されるチャートの巨石に向かって地形が押し流されている状況が把握できた。また古墳裾部の東側から北側及び南側から西側に向かって周溝を表すと推定される地形の流れも把握できた。墳頂部では標高67.31m、東側の説明板で標高66.50mを観測し、墳丘高低差1.81mであった。

表土掘削 地形測量後、重機（バックホー）を使用して墳丘の表面に堆積した腐葉土混じりの表土を除去した。表土掘削後に表面に現れた樹木根の伐採と清掃を行い、確認調査坑の位置を確認し、事前に石室の開口方向を見極めるために補助トレンチを設定して掘り下げを行ったが、石室の開口方向を特定することが出来なかった。

墳丘・周溝調査 補助トレンチにて石室の開口方向を見極めることが出来なかったため、事前の確認調査と墳丘の地形測量などの結果に基づき、南東方向に石室の開口方向を想定し、北西を起点に時計まわりに1区・2区・3区・4区と区分し、墳丘にトレンチを設定し人力による掘り下げを開始した。古墳・周溝のトレンチ断面の確認後、各区にて墳丘・周溝の掘り下げを行った。その結果、墳丘中央部に開けられた大きな穴（窪み）の存在が確認でき、石室がほぼ全壊に近い状態で破壊されていたことが判明した。墳丘中央及び墳丘表面や周溝の上層に堆積する墳丘土などの大半が、石室が破壊された後に堆積及び客土による盛土（以下盛土と記す）によって造成されていたことが判明した。また、道路改良工事による調査のため、工事によって壊される部分についてのみ墳丘を解体し、保存対象部分は墳丘の解体をせずに墳丘を保存した。

石室調査 開口方向が当初想定した南東ではなく、南西方向であることが判明し、石室の推定範囲を、北西を起点に時計まわりに1区～6区に区分し、人力にて丁寧に掘り下げを行った。奥壁推定地付近で倒れていた大型の石材と、唯一残存していた羨門立柱石の大型石材を除去し、墓壇底面まで掘り下げを行ったが、墳丘同様に工事によって壊される部分についてのみ解体し、保存対象部分は解体をせずに保存した。

図面作成 墳丘・周溝及び石室などの平面と断面図は、TSと電子平板を使用して計測し、写真撮影データからオルソ画像を生成し、三次元計測で得られた点群データとあわせて図面化した。

写真撮影 記録写真は、中判カメラ（6×7判）にてモノクロフィルムとリバーサルフィルムの双方で撮影し、あわせて2,000万画素以上のフルサイズセンサー搭載デジタル一眼レフカメラ（Nikon D750）を使用して撮影した。完掘時の全景写真は、大判カメラ（1×5判）を使用して撮影した。空中写真撮影は、1,900万画素以上のUAV搭載のデジタルカメラを使用した。

(2) 調査経過

発掘調査 令和6年(2024)8月8日に現地にて浜松市市民部文化財課、浜松市浜名土木整備事務所、浜松市立缶玉中学校、とやま建材株式会社、株式会社アーキジオによる調査開始前の事前確認を行い、15日に基準点測量を実施した。19日から地形測量、22日から表土掘削を行い、30日に現場事務所を設置した。

9月2日に作業員の新規入場教育を行い、4日から作業員による作業を開始した。まずは墳丘表面の根除去と清掃を行い、6日から墳丘にトレンチを設定し、人力による掘り下げ作業を開始した。20日に邪魔な切り株を除去し、24日から墳丘中央の盛土除去を開始すると、25日には石室の開口方向が予想より西側になることが判明した。あわせて墳丘断面の測量作業を行う。

10月に入り、2日に石室推定範囲の検出を行い、継続して測量作業を行った。7日から周溝の検出を行い10日まで周溝の掘り下げを行った。14日から石室部分の掘り下げと測量、15日に羨道部分の調査区を拡張し、16日から丁寧に羨門部分の調査と記録を行った。18日に高所作業車を使用して全景の写真撮影を行う。19日に現地説明会を開催し、40名の見学があった。

21日から墳丘解体作業を開始し、24日に羨門立柱石下SP01の調査・記録を行う。25日に現地調査を完了し、令和6年(2024)10月28日に現場事務所の撤収を行い、調査完了となった。

整理作業 整理作業は、遺物の水洗作業を現地作業と並行して10月から開始し、現地調査完了後に株式会社アーキジオ中日本支店にて、遺物の接合・復元・注記、実測遺物の抽出・実測・トレース・写真撮影・版組、遺構図面の編集、遺構写真の選出・版組を行い、令和7年(2025)1月～2月に報告書執筆・編集を行い、令和7年(2025)3月28日に報告書を刊行した。

調査参加者

現地作業 大野功、小林俊海、佐藤政治、鈴木清、須部公夫、竹内誠一

整理作業 小笠原寛仁、桂川慧、後藤秀夫、柴田俊、小平ヨミ



Fig.4 墳丘現況測量



Fig.5 羨門立柱石検出作業



Fig.6 遺構測量作業



Fig.7 現地説明会

第2章 調査成果

1 墳丘及び周溝

(1) 墳丘の状況

調査前の墳丘 (Fig. 8) 調査開始前の墳丘は、樹木や雑草で覆われたような状態であったが、樹木伐採実施後は、見た目にも古墳と認識できる状態であった。本古墳の墳丘は、調査前現況図のとおりに良好な状態で、確認調査の結果から、墳丘を取り囲むように周溝が巡っていることが予測できた。埋葬施設は横穴式石室と予測でき、開口方向は詳らかではないが、確認調査の結果及び地形、過去の同古墳群における発掘調査成果などから、南東方向と予想された。地形測量の結果、墳丘形約 11.00 m の円墳で、墳丘残存高 1.81 m、葺石の存在は無く、墳裾部に周溝が巡ることが予想でき、墳丘の残存状態はとても良好であることが確認できた。

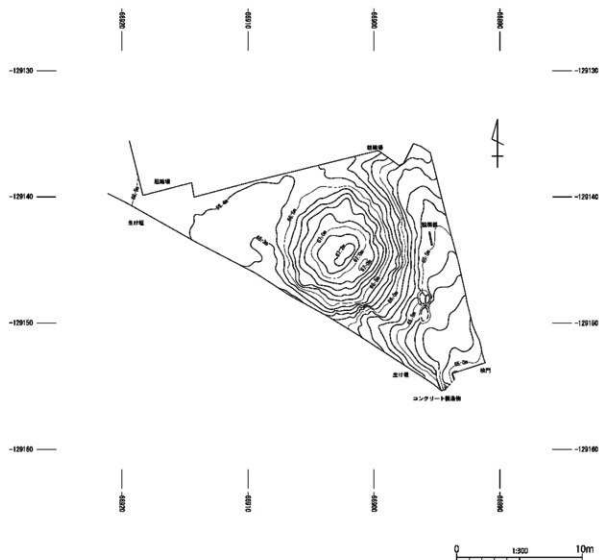


Fig. 8 調査前現況図

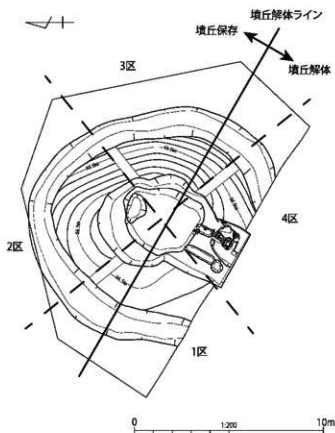


Fig.9 地区割、墳丘解体・保存範囲図

墳丘断面 (Fig.12・13) 墳丘構造を把握するために、周溝の確認とあわせて、南北 (A-A' 間) 及び東西 (B-B' 間) の二方向にトレンチを設定して掘り下げを行った。

その結果、墳丘の大半が既に破壊され、2次墳丘は一部を残して消滅し、1次墳丘の上層部分も破壊され下層部分のみが残存している状態であった。大規模な墳丘の破壊は、石室の破壊とあわせて行われたことが予想でき、石室に相当する部分が大きな穴 (窪地) となって陥没し、その周囲にドーナツ状に1次墳丘の下層部分が残っていた。大規模に破壊された石室と墳丘の上層に、山砂などを主体とした盛土が積み上げられて、改めて墳丘の造成が実施されていた。残念ながら、良好な状態で残存していた調査前の墳丘は、築造時の形状が残ったものではなく、後世の盛土によって造成されたものであった。

(2) 2次墳丘

墳丘 墳裾部の東側と南側及び北側に一部残存が確認でき、1～2 cm程度の小礫を少量含む灰褐色の粘質土であった。形状は円形である。

規模 周溝内側の計測で、墳丘径 9.70 mである。

(3) 1次墳丘

墳丘 良好に残存していた南北 (A-A' 間) の墳丘断面によれば、1次墳丘は残存高 0.65 m、周溝の内側に区画帯として明褐色粘質土が幅 1.90 m、高さ 0.20 mほど積まれ、その上層にオリブ黒色粘質土が積み上げられ、1次墳丘の大半はその上層に積み上げられた1～3 cm程度の小礫を少量含む黒色や黒褐色などの粘質土によって構築されていた。

規模 1次墳丘の上に2次墳丘を積み上げた構造であったことが予測でき、墳丘径は2次墳丘とほぼ同じと考えられる。

(4) 周溝

周溝 墳丘に比べて残存状態は良好で、円形の墳丘を取り囲むように断面U字状の溝が巡る。溝底へ向かっての傾斜は緩やかで、底面には凹凸は見られず平坦に近い形状である。

規模 周溝外径 13.30 m、幅 1.10～1.60 m、深さ 0.20～0.40 mである。

堆積土 周溝の埋没土は単層で、黒褐色の粘質土が堆積していた。

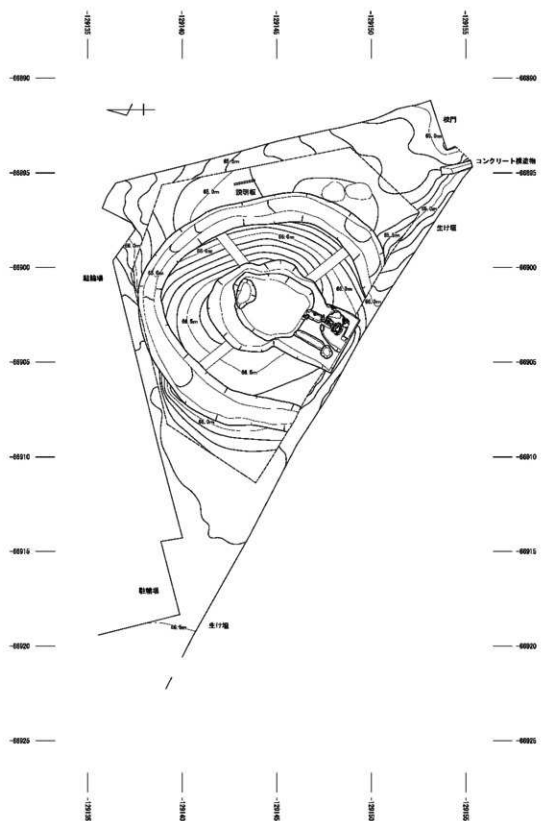


Fig.10 調査区全体図

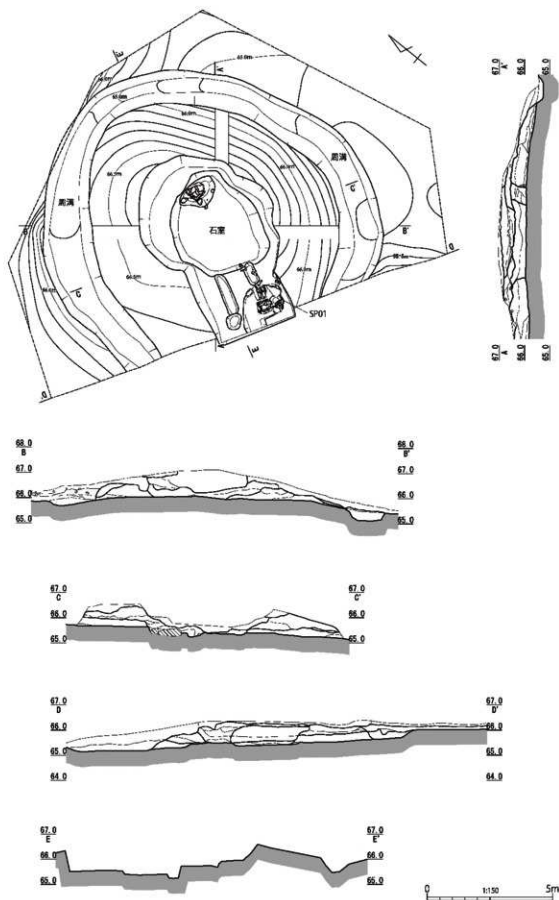
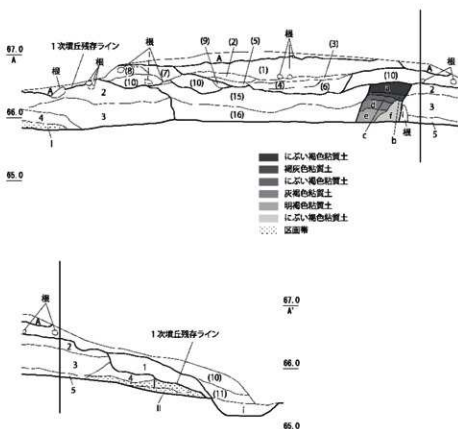


Fig. 11 墳丘・周溝断面図 (1)



環丘A-A断面

表土:

A 灰色砂質土(しまりなし 1~2cm露少量含む)

堤上II段階

- (1) 褐色砂質土:山砂(しまりなし 1~8cm露少量含む)
- (2) 褐色砂質土:山砂(しまりなし 8~10cm露多量含む)
- (3) 黄灰色土(しまりなし 2~10cm露少量含む)
- (4) にじみ褐色粘質土(しまりなし 1cm露少量含む)
- (5) 褐色砂質土(しまりなし)
- (6) にじみ黄褐色砂質土(しまりなし 0.5~1cm露含む)

堤上II段階

- (7) 黄灰色土(しまりなし 1cm露少量含む)
- (8) 黄灰色土(しまりなし 0.5cm露少量含む)
- (9) 灰褐色土(しまりなし 0.1~0.5cm露含む)
- (10) 黄灰色土(しまりなし 1cm露含む)
- (11) 黄灰色土(しまりなし)

堤上I段階

- (12) にじみ赤褐色粘質土(しまりなし 地山粒子多量含む 1~2cm露少量含む)
- (16) 明赤褐色粘質土(しまりなし 地山粒子多量含む 1~3cm露少量含む)

石室露出

- a にじみ褐色粘質土(しまりあり 地山粒子多量含む)
- b 泥灰色粘質土(しまりあり 地山粒ブロック含む)
- c にじみ褐色粘質土(しまりあり 地山粒子多量含む)
- d 灰褐色粘質土(しまりあり 地山粒子多量含む)
- e 明褐色粘質土(しまりあり 地山粒子多量含む)
- f にじみ黄褐色粘質土(しまりあり 地山粒子と泥褐色土粒子をマゼンタ状に含む)

2次横丘

- 1 泥褐色粘質土(しまりあり 1~2cm露少量含む)

1次横丘

- 2 泥褐色粘質土(しまりあり 1~3cm露少量含む)
- 3 灰褐色土(しまりあり 2~3cm露少量含む)
- 4 オリーブ褐色粘質土(しまりあり 0.5cm露少量含む)
- 5 明黄褐色粘質土(しまりあり 地山粒子多量含む)

区画線

- I 明褐色粘質土(しまりあり 地山粒子多量含む)
- II 明褐色粘質土(しまりあり 地山粒子多量含む Iより暗色強い)

開溝

- 1 泥褐色粘質土(しまりあり 地山粒 f 含む)

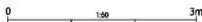
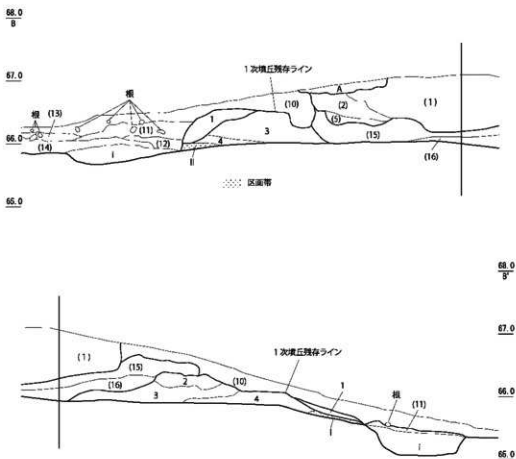


Fig. 12 環丘・周溝断面図 (2)



墳丘B-8断面

表土

A 灰色砂質土(しまりなし 1~2cm層少含む)

盛土層

- (1) 褐色砂質土(山砂(しまりなし 1~8cm層少含む)
(2) 褐色砂質土(山砂(しまりなし 8~10cm層多含む)
(5) 褐色砂質土(しまりなし)

盛土II層

- (10) 黄灰色土(しまりなし 1cm層含む)
(11) 黄灰色土(しまりなし)
(12) 明褐色土(しまりなし)
(13) 褐色土(しまりあり)
(14) 黒色土(しまりあり)

盛土I層

- (6) にがい土褐色土(しまりなし 地山粒多量含む 1~2cm層少含む)
(16) 明褐色土(しまりなし 地山粒多量含む 1~3cm層少含む)

2次墳丘

1 灰褐色土(しまりあり 1~2cm層少含む)

1次墳丘

- 2 褐色土(しまりあり 1~3cm層少含む)
3 褐色土(しまりあり 2~3cm層少含む)
4 オリーブ褐色土(しまりあり 0.5cm層少含む)

区画等

- I 明褐色土(しまりあり 地山粒多量含む)
II 明褐色土(しまりあり 地山粒多量含む Iより褐色色い)

埋没

- I 灰褐色土(しまりあり 地山粒多量含む)



Fig. 13 墳丘・周溝断面図 (3)

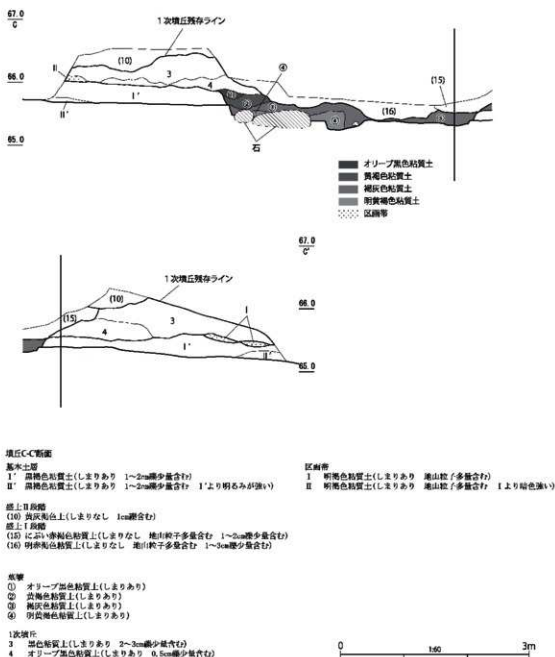
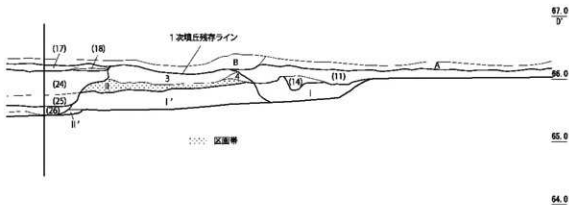
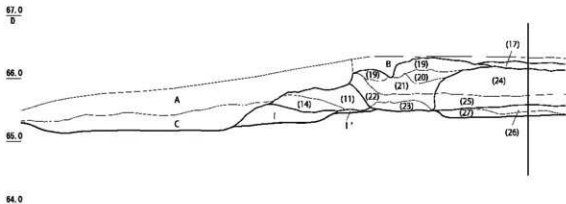


Fig. 14 墳丘解体ライン墳丘断面図

(5) 墳丘・周溝出土遺物

遺物出土状況 遺物は、墳丘及び周溝からの出土であるが、羨門立柱石下 SP01 から出土したものを除き、盛土からの出土である。墳丘出土遺物は、石室が羨門立柱石を除きほぼ完全に破壊された後に石室跡地（窪地）に堆積した盛土中からの出土で、周溝出土遺物も埋没した周溝上に堆積した盛土中からの出土である。既存の道路によって前底部は破壊されていた一方、周溝は良い状態で残っていたが、周溝埋没土から本墳の築造にかかわる遺物の出土はなかった。また、墳頂部の確認調査坑付近から、須恵器破片がまとめて出土した。



墳丘B-D断面

表上

- A 灰色粘質土(しまりなし 1~2cm層少量含む)
B 灰白色砂質土(しまりなし 2~3cm層含む)
C 褐色粘質土(しまりなし 1~2cm層少量含む)

区画II段層

- (11) 黄灰色粘土(しまりなし)
(14) 黒色粘土(しまりあり)

基本土層

- I' 黒褐色粘質土(しまりあり 1~2cm層少量含む)
II' 黒褐色粘質土(しまりあり 1~2cm層少量含む I'より明るみが強い)

開口部墳丘段層

- (17) 褐色粘土(しまりなし 1~2cm層少量含む)
(18) 灰白色砂質土(しまりなし)

開口部墳丘II段層

- (19) 灰褐色粘質土(しまりなし 1~2cm層含む)
(20) 灰色粘質土(しまりなし 1~2cm層含む)
(21) 灰色砂質土(しまりなし 1~2cm層含む)
(22) 灰色粘質土(しまりなし 1~2cm層含む)
(23) 褐色粘質土(しまりなし)

開口部墳丘I段層

- (24) 黒褐色粘質土(しまりなし 1~2cm層含む)
(25) 黒褐色粘質土(しまりなし 1~2cm層含む 24より暗みが強い)
(26) 黒褐色粘質土(しまりなし)
(27) 黒褐色粘質土(しまりなし)

1次墳丘

- 3 黒色粘質土(しまりあり 2~3cm層少量含む)
4 オリーブ黒色粘質土(しまりあり 0.5cm層少量含む)

区画I層

- II 明褐色粘質土(しまりあり 地山粒多量含む Iより暗色強い)

区画

- I 黒褐色粘質土(しまりあり 地山粒を含む)

盗掘痕の可能性がある

竈・灰皿等の可能性がある



Fig. 15 石室開口部墳丘・周溝断面図

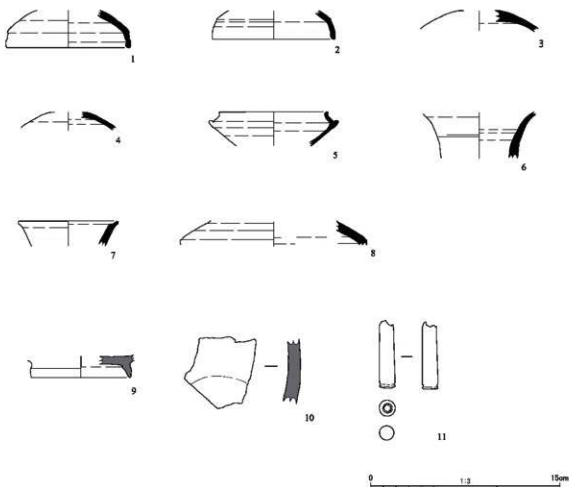


Fig. 16 墳丘・周溝出土遺物

古墳時代の遺物 (Fig. 16) 全て破片で、完形のものはない。須恵器の坏蓋4点、坏身1点、瓶3点を抽出して図化した。

1～8は須恵器で、1・2・5・6は墳頂部の確認調査坑付近からの出土で、1・2は坏蓋の天井部から口縁部で推定口径9.6cm、5は坏身の口縁部から体部で推定口径8.7cm、6は瓶の頸部の破片である。

3は墳丘1・4区ベルト出土の坏蓋の天井部、4は墳丘表土掘削時に出土した坏蓋の天井部、7・8は墳丘4区出土の瓶で、7は口縁部で推定口径8.0cm、8は体部上半の肩部の破片である。

時期は、1・2・4～6は7世紀前半～中頃、3・7・8は7世紀後半と考えられる。

古代以降の遺物 (Fig. 16) 灰釉陶器の碗1点、中世陶器破片1点、銃弾（薬莢）1点を図化した。

9は墳丘表土掘削時に出土した灰釉陶器碗の底部で、内面に透明釉が施され、高台は貼付で高さ1.0cmのしっかりとした作りで、推定底径8.0cmである。10・11は周溝1区からの出土で、10は常滑産の甕の胴部破片、11は銃弾の薬莢である。11は真鍮製で、弾丸（弾頭）を欠損するが、残りがよく残存高5.1cm、火薬は無く内面は空洞であるが、雷管・リムの状態もよい。リムに刻印は認められず、底部（リム）径1.2cm、底部中央の雷管径0.6cm、重さ10.8gである。

時期は、9は10世紀、10は13～15世紀、11は戦前～戦中のものと考えられる。

2 埋葬施設

(1) 石室の状況

石室 (Fig. 17) 南西に向かって開口した横穴式石室で、推定方位 $S-30^{\circ}-W$ を測る。石室開口部の墳丘・周溝断面 (D-D' 間) の堆積地層からも開口部は南西で間違いないと判断できる (Fig. 15)。開口部から向かって右側の羨門立柱石のみが残存し、羨道・玄室ともに石室は完全に破壊されているが、奥壁に相当する個所で奥壁に使用されていたと想定されるチャートの石材が倒れた状態で出土した。既に墳丘内から取り出されて墳裾の東側に置かれていた大型石材もチャートで、石室石材には主にチャートの山石が用いられていたと想定される。また、墳丘・石室の破壊痕跡及び羨道側壁の抜き取り痕跡から、両袖式石室であったことが想定される。

開口部から向かって右側 (東側) の羨門立柱石 1 石のみが原位置を保って残存していた。大型の立柱石で、正面からの高さ 0.80 m、幅 0.62 m、奥行 0.52 m を測る。石材はチャートである。周囲から確認できた石は、原位置を保つものではなく、墳丘・石室が破壊された時に動かされた可能性が高い。

規模 窪地状となった破壊された痕跡の全体規模は長さ 7.60 m、玄室部分では長さ 5.10 m、幅 5.30 m を測る。破壊痕跡から想定した石室の規模は、全長約 5.50 m、玄室長約 3.50 m、玄室幅約 2.50 m、羨道長約 2.00 m、羨道幅約 0.70 m ほどといえよう。破壊が著しいため石室形態は明確にし難いが、大屋敷 C 古墳群における過去の調査結果から、三河型石室の影響を受けた在来系の擬似両袖式石室が想定される。

裏込め 墳丘・周溝断面 (A-A' 間) にて、破壊されずに石室の裏込めが一部ではあるが残存していた。褐色粘質土が 5 層にわたって層状に積み上げられている。

墓壇 墳丘断面 (C-C' 間) によれば、墳丘・石室の構築面となる基本土層 (I' 層) を掘り下げて墓壇が構築されており、玄室部分での墓壇幅は 4.60 m、深さ 0.50 m を測る。

SP01 (Fig. 18) 立柱石下の墓壇内で確認できた小穴で、平面は楕円形、断面は U 字形で、長軸 0.58 m、短軸 0.45 m、深さ 0.18 m を測り、底面は丸底である。上層に黒褐色粘質土、下層ににぶい赤褐色粘質土が堆積する。須恵器坏蓋 1 点と土師器小碗 1 点が出土した。

(2) 石室内出土遺物

遺物出土状況 遺物は、墓壇内から確認できた SP01 から出土した。須恵器坏蓋 1 点と土師器小碗 1 点である。坏蓋は埋没土上層の黒褐色粘質土上面にて内面を上にして逆さの状態で出土し、埋没土上層の黒褐色粘質土中から土師器小碗が破片となって出土した。一括して埋納された可能性が高い。

SP01 出土遺物 (Fig. 19) 須恵器坏蓋は完形で、土師器小碗は破片を接合したが器形全体の約 60% の残存である。

12 の須恵器坏蓋は、口径 12.4 cm、器高 3.3 cm、天井部中央に宝珠形のつまみが付き、つまみ径 2.2 cm、つまみ高 1.1 cm である。天井部の外面全体に自然釉が見られ、天井部内面中央はつまみ貼り付け時の指頭圧痕によって器壁が薄くなっている。

13 は土師器の小碗で、口径 9.5 cm、器高 4.8 cm、手捏ね成形 (粗製) のため全体に歪みがあり、外面にひび割れや粘土紐による輪積み痕・指頭圧痕、内面にへら当て痕が明瞭に残る。

時期は 12・13 ともに 7 世紀後半と考えられる。

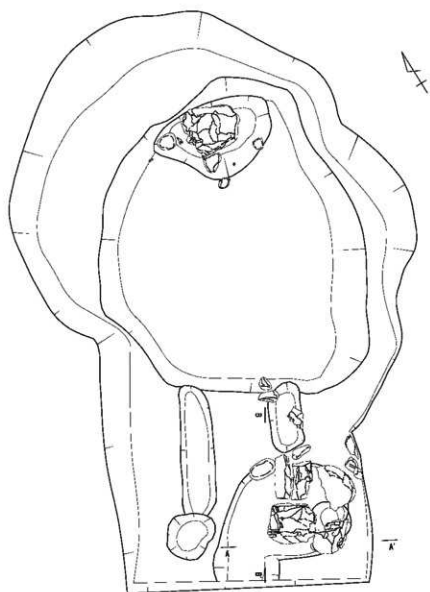


Fig. 17 石室平面・狹門立柱石正面及び側面図

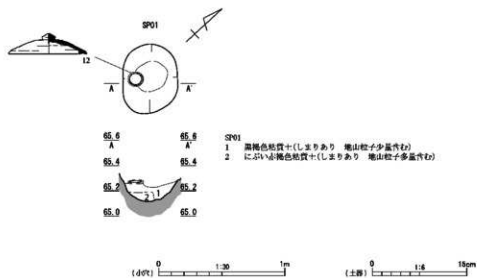


Fig. 18 狭門立柱石下 SP01 平面・断面図

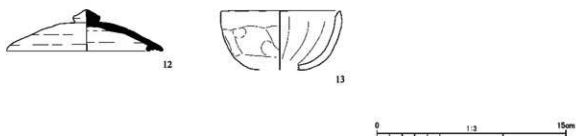


Fig. 19 SP01 出土遺物

3 縄文時代の遺構と遺物

遺物出土状況 墳丘及び周溝から縄文時代の土器と石器が出土している。墳丘・周溝から出土した他の遺物と同様に、盛土中からの出土である。墳丘解体後に基盤層上面を精査したが、遺構は確認できなかった。

縄文時代出土遺物 (Fig. 20) 14・15は縄文時代の土器破片である。

14・15ともに墳丘1区からの出土である。14は無文平縁の深鉢の口縁部で、全体に摩滅が著しく表面には剥落が見られるが、丸く内湾する器形と胎土から中期の曽利Ⅰa式に相当すると考えられる。15は器壁が薄く内面黒色で焼きむらが見られるが、全体に摩滅が著しい。石器に比べて土器の出土が少なかった。

16～30は縄文時代の石器である。

16～20は石鏃である。16・20は墳丘2区、17は玄室部、18は墳頂部、19は墳頂部の確認調査坑付近からの出土である。形態は全て無茎石鏃である。16は基部が欠損しているが完形に近い形状で、挟り幅は広く、正三角形に近い。側縁は直線である。石材は黒曜石で、透明度が高いが一部黒く不透明な部分がある。17は尖頭部と基部が欠損している。挟り幅は広く側縁は鋸歯状である。石材は黒曜石で、透明度が低く一部黒色で不透明な部分がある。18は尖頭部と片脚が欠損している。挟りの長さは長く側縁は直線である。石材はガラス質黒色安山岩である。19は片脚が欠損している。側縁は直線である。石材は流紋岩である。20は両脚部先端が欠損している。側縁は直線である。石材は硬質頁岩である。

21～25は削器である。21は墳丘1・2区トレンチ、22は墳丘1区、23・24は墳丘3区、25は周溝2区からの出土である。21は刃部に細かい加工が見られるが未製品に近い。石材は黒曜石で、黒く不透明である。22は刃部に使用痕は見られず、未製品と思われる。石材は黒曜石で、透明度が高いが一部黒く不透明な部分がある。23・24は完形で、石材は硬質細粒凝灰岩である。25は全体的に摩耗し、石材は頁岩である。

26・27は楔形石器である。26・27は墳丘1・2区トレンチからの出土である。26は完形で、側面には部分的に細かい打撃痕が残る。石材は黒曜石で、黒く不透明である。27も完形で、両側面に打撃痕、表面に自然面が残る。石材は蛇紋岩である。

28は剥片石器である。28は墳丘北側からの出土である。28は側縁に刃部は見られず、方形に加工されている。石材は黒曜石で、黒く不透明である。

29・30は打製石斧である。29は墳丘1・2区トレンチ、30は周溝1区からの出土である。29は短冊形で、欠損している部分がなく完形である。刃部には使用痕が見られ摩耗している。両面剥離と思われる。石材は緑色片岩である。30も短冊形で、欠損している部分がなく完形である。全体に摩耗していて、両面剥離と思われる。石材は緑色片岩である。

石器は、狩猟・工具・農具として使用された縄文時代の一般的なもので、図化した15点のうち石鏃2点、削器2点、楔形石器1点、剥片石器1点の計6点に黒曜石が使用されている。

石器の時期は、石鏃の全てが無茎石鏃で、打製石斧の形状が短冊形であることから、中期以前のものである可能性が高い。さらに墳丘1区から出土した縄文時代中期の曽利Ⅰa式に相当する土器(Fig. 20-14)と考えあわせると、中期に相当する可能性が高いと思われる。

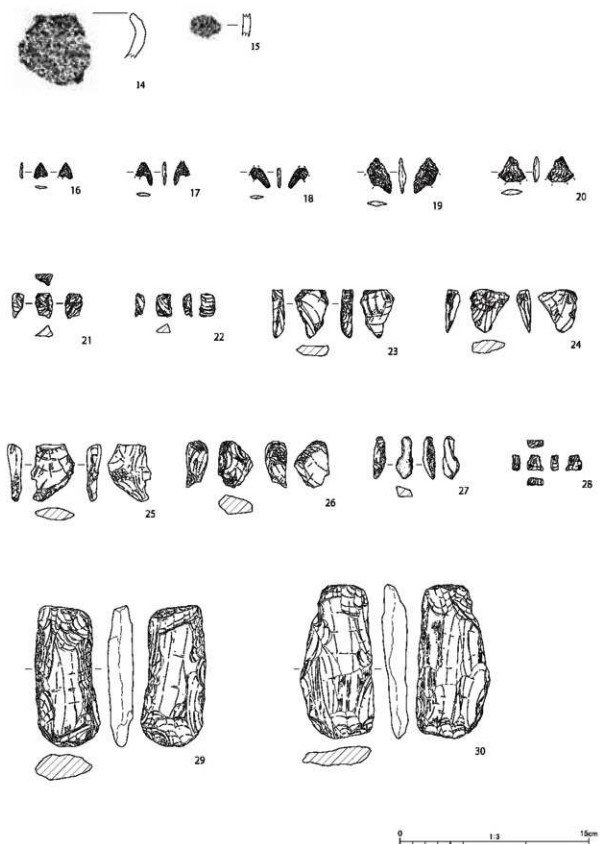


Fig. 20 縄文時代出土遺物

第3章 総括

1 発掘調査の成果

墳丘・周溝 大屋敷C古墳群を構成するC5号墳は、発掘調査の結果、周溝外径13.30m、墳丘径9.70mの円墳であることが確認できた。平面形は、正円形ではなく墳丘・周溝ともに北西に向かって張り出すように歪みが見られ、北西から南東に向かって傾斜する丘陵地形による制約が原因と考えられる。周溝幅も一定ではなく、北西がやや狭くなるのも同様の原因と考えられる。調査前の見かけ上の状態に反して墳丘の残存状態は悪かったが、墳丘構築の方法は、1次墳丘の完成後に2次墳丘を形成して墳丘を完成させる浜松地域の後期古墳の典型といえよう。

埋葬施設 破壊が著しかったが南西方向に開口する横穴式石室を検出した。石室の破壊痕跡及び羨道側壁の石材抜き取りの痕跡から両袖式石室が想定される。石室の開口方向が南西であることも、墳丘・周溝と同様に、立地地形による制約が要因と想定される。今回の調査では、開口方向から向かって右側（東側）の羨門立柱石のみが原位置を保って残っていた。特質すべきは、羨門立柱石の下から確認できたSP01から須恵器坏蓋1点と土師器小碗1点が出土したことである。

構築儀礼 羨門立柱石下SP01から出土した須恵器坏蓋と土師器小碗は、一括埋納された可能性が高い。須恵器坏蓋と土師器小碗は、儀礼に使用された祭具（器）と考えられ、本古墳では石室の構築前に儀礼が執り行われ、羨門立柱石の設置に深い意味があったことが想定される。

古墳築造に伴う儀礼は、古墳完成までの各過程において執り行われたもので、土坑を穿って中に土器を一括埋納するといった儀礼については、土地神に対する飲食供献の儀礼を示すものといわれてきた（土生田1995）。また、東海地方では石室前面での儀礼の多くが、石室の入口から左右にずれた位置で行われていることが多いことが指摘されており（岩原2020）、本古墳での羨門立柱石の一方の下に穴を穿って土器を埋納していることと共通する。

このことから、本古墳では石室の構築前に、飲食供献の儀礼が執り行われたことが考えられる。

築造時期 SP01出土の遺物から、7世紀後半の築造と考えられる。

転用の可能性 墳丘中央部が大きな窪地となってその周囲を囲むようにドーナツ状に墳丘が残存していた状況は、浜松市浜名区所在の神内平4号墳の残存状況と共通する。神内平4号墳は、戦時中に高射砲陣地として転用されており（細江町教委2005）、墳丘・石室ともに中心部分がほぼ全壊に近い状態で壊されている状況と本古墳から銃弾の薬莖1点が出土していることから考えて、本古墳も戦時中に軍事的施設として転用されていた可能性も考えられる。

2 今後の展望と課題

今回の大屋敷C5号墳の調査においては、終末期の横穴式石室を伴う円墳を確認した。横穴式石室については破壊が著しく石室形態を明確にできなかったが、構築時期や同一古墳群内における発掘調査成果から、三河型石室の影響を受けた在来系の擬似両袖式石室が想定される。官口地区においては、大屋敷C古墳群のほか大屋敷A古墳群で多数の横穴式石室を伴う古墳が調査され、近年では北新屋B古墳群でも複数の古墳が調査されるなど、後期から終末期の群集墳の調査事例が蓄積しつつある。今後の調査の進展により、当地区における古墳時代の様相がより明確になることを期待し

たい。

また、今回の大屋敷 C5 号墳の調査においては、埋葬施設を含む古墳の中心部が徹底した破壊を受けていた。浜松市内の古墳においては、副葬品や石室石材の取得を目的とした破壊が著しい事例が多いが、大屋敷 C5 号墳においては、これらを考慮しても破壊の大きさが際立って見える。調査中に小銃弾のものと考えられる薬莢が出土しており、戦時中に古墳が軍事目的に転用された可能性が考慮される。近傍の高根山の山中には戦時中に掘削された塹壕が現在も残存しているが、太平洋戦争末期における軍事施設の構築と古墳の二次利用の実態については今後の検討課題の一つである。

【参考文献】

- 岩原剛 2020「横穴式石室墳の葬送儀礼—豊橋市相生塚古墳の調査成果をもとに—」『横穴式石室の研究』同成社
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004『大屋敷C古墳群・大屋敷1号竈』
高田健一・西尾潤 2018「鳥取砂丘出土の銃弾」『待兼山考古学論集Ⅲ—大阪大学考古学研究室 30 周年記念論集—』
土生田純之 1995「古墳構築過程における儀礼—墳丘を中心として—」『古墳文化とその伝統』勉誠社
浜北市 2004『浜北市史 資料編 原始・古代・中世』
浜松市教育委員会 2017『宮口における遺跡の調査—北新屋B古墳群・大屋敷古竈跡群・譲栄Ⅲ遺跡・北新屋遺跡—』
浜松市教育委員会 2022『石ノ塔古墳』
(財)浜松市文化協会 1998『宇藤坂古墳群』
細江町教育委員会 2005『神内平古墳群』

出土遺物観察表

凡例

「残存率」 全体における残存している割合を% (10%きざみ) で示す

「反」 反転して図化したもの

大きさの単位は「cm」 重量の単位は「g」

「色調」は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠している

出土遺物観察表

図 番号	区	遺物/層位	種類	細別	存在	反転	長さ (cm)	幅 (cm)	口径 (厚)	底径 (重量)	色割	土質	焼成	備考
16	1	埴輪製土坑 須恵器	須恵器	外蓋	20	反	-	(3.0)	(9.0)	-	外面：黄灰 内面：黄灰	密	良	内外面ロクロナデ
16	2	埴輪製土坑 須恵器	須恵器	外蓋	10	反	-	(2.3)	(9.0)	-	外面：黄灰 内面：黄灰	密	良	内外面ロクロナデ
16	3	埴丘1・4区 ベルト	須恵器	外蓋	10	反	-	(1.2)	-	-	外面：黄灰 内面：黄灰	密	良	内外面ロクロナデ 外面ケズリ
16	4	表土層削 削所南	須恵器	外蓋	10	反	-	(1.4)	-	-	外面：黄灰 内面：黄灰	密	良	内外面ロクロナデ
16	5	埴輪製土坑 須恵器	須恵器	外蓋	10	反	-	(2.7)	(8.7)	-	外面：黄灰 内面：黄灰	密	良	内外面ロクロナデ
16	6	埴輪製土坑 須恵器	須恵器	瓶	10	反	-	(3.0)	-	-	外面：黄灰 内面：黄灰	密	良	内外面ロクロナデ
16	7	埴丘4区 30cm下	須恵器	瓶	10	反	-	(2.0)	(8.0)	-	外面：黄灰 内面：黄灰	密	良	内外面ロクロナデ
16	8	埴丘4区 30cm下	須恵器	瓶	10	反	-	(2.0)	(15.0)	-	外面：黄灰 内面：黄灰	密	良	内外面ロクロナデ
16	9	表土層削 削所南	灰釉陶器	碗	10	反	-	(1.8)	-	(8.0)	外面：灰釉 内面：灰釉	密	良	内外面ロクロナデ 内面釉
16	10	埴溝1区	陶器	甕	10	-	-	(5.1)	-	-	外面：にじい黄陶 内面：にじい黄陶	密	良	甕、内外面ロクロナデ
16	11	埴溝1区	金属製品	鉄片	80	-	-	(5.1)	1.2	10.8	外面：鐵線 内面：-	-	-	真鍮製、界丸(界頭)欠損
19	12	SP01	須恵器	外蓋	100	-	-	3.3	12.4	-	外面：灰釉 内面：灰釉	密	良	内外面ロクロナデ・自然釉 外面ロクロナデ・天井部指頭圧痕
19	13	SP01	土器	小瓶	60	-	-	(4.8)	(9.5)	-	外面：灰釉 内面：灰釉	密	良	内外面手捏ね(電製) 外面指頭圧痕 内面へつ圧痕
20	14	埴丘1区 10cm下	陶文土器	鉄鉢	10	-	-	(3.7)	-	-	外面：引堀 内面：明堀	並	不良	内外面磨耗 外面剥落
20	15	埴丘1区	陶文土器	鉢	10	-	-	(1.8)	-	-	外面：磨 内面：磨	並	不良	内外面磨耗
20	16	埴丘2区	石器	無茎石鏃	80	-	1.2	1.1	0.2	0.2	-	-	-	-
20	17	表土層削	石器	無茎石鏃	70	-	1.7	(1.3)	0.3	0.4	-	-	-	-
20	18	表土層削 削所南	石器	無茎石鏃	60	-	1.6	(1.2)	0.2	0.4	-	-	-	-
20	19	埴輪製土坑 須恵器	石器	無茎石鏃	80	-	2.7	(1.50)	0.5	1.6	-	-	-	-
20	20	埴丘2区 10cm下	石器	無茎石鏃	80	-	1.9	(2.1)	0.50	1.50	-	-	-	-
20	21	埴丘1・2区 トレンチ	石器	削器	100	-	1.9	1.0	1.0	1.7	-	-	-	器部に細かい加工
20	22	埴丘1区 10cm下	石器	削器	100	-	1.8	1.3	0.7	1.4	-	-	-	(未製品)
20	23	埴丘3区 10cm下	石器	削器	100	-	3.8	2.2	1.0	8.7	-	-	-	-
20	24	埴丘3区 10cm下	石器	削器	100	-	3.4	3.2	1.2	8.9	-	-	-	-
20	25	埴溝2区	石器	削器	100	-	4.2	3.4	1.0	14.7	-	-	-	全体的に摩耗
20	26	埴丘1・2区 トレンチ	石器	楔形石器	100	-	4.8	最大幅:2.2 最小幅:1.1	1.7	14.7	-	-	-	-
20	27	埴丘1・2区 トレンチ	石器	楔形石器	100	-	3.3	最大幅:1.2 最小幅:0.7	0.9	3.5	-	-	-	-
20	28	埴丘北	石器	削片	100	-	-	最大幅:1.3 最小幅:0.8	0.6	0.9	-	-	-	-
20	29	埴丘1・2区 トレンチ	石器	打製石片	100	-	11.2	最大幅:5.0 最小幅:4.5	2.1	163.3	-	-	-	両面研磨
20	30	埴溝1区	石器	打製石片	100	-	12.7	最大幅:5.8 最小幅:3.9	2.1	156.4	-	-	-	全体的に摩耗

圖 版
PLATE



1 調査前状況(東から)



2 表土除去後(東から)



1 墳丘トレンチ設定状況(上から)



2 墳丘トレンチ設定状況(南から)



1 墳丘中央盛土除去後：墳丘断面状況(南から)



2 奥壁付近倒石出土状況(西から)



1 北側周溝検出状況(東から)



2 周溝完掘状況(東から)



1 墳丘全景(南から)



2 墳丘全景(東から)



1 埋葬施設検出状況(上から)



2 埋葬施設検出状況(北西から)



1 炭門立柱石正面検出状況(西から)



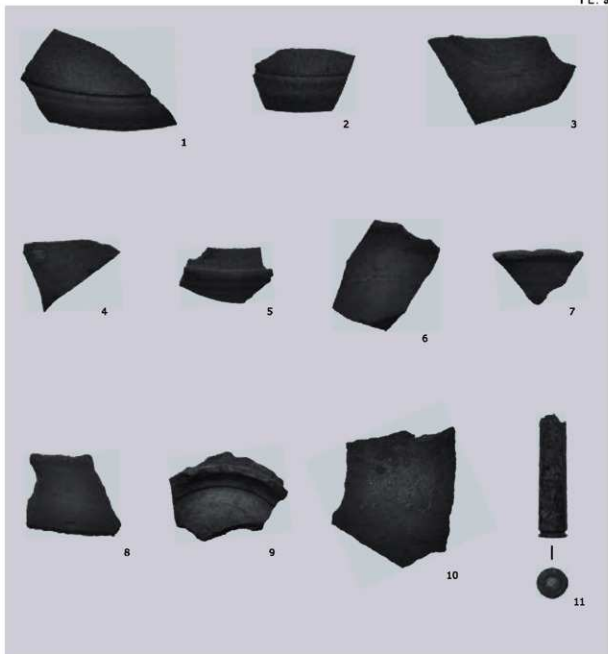
2 SP01遺物出土状況(南から)



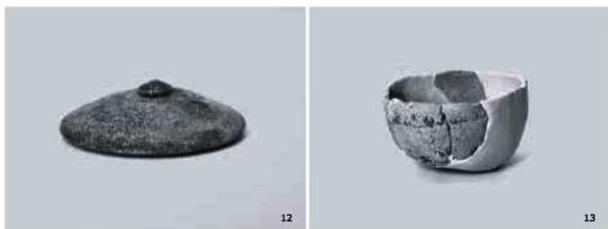
1 完掘状況(東から)



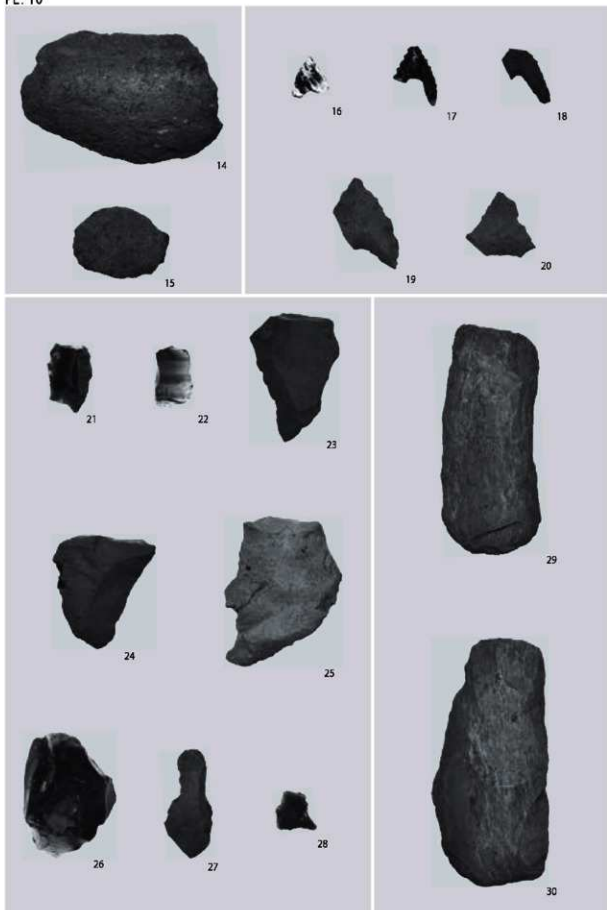
2 完掘横断面(北西から)



1 墳丘・周溝出土遺物



2 SP01出土遺物



報告書抄録

書名（ふりがな）	大屋敷C古墳群2（おおやしきしーこふんぐん2）							
編著者名	井口智博（編集） 基峰修 三島ゆかり							
編集・発行機関	浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652 浜松市中央区元城町103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (050) 3730-1391							
発行年月日	2025年 3月 28日							
ふりがな 遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
おおやしき しーこふんぐん 大屋敷C古墳群	静岡県 浜松市浜名区 宮口	221392	6-04-11	34 度 83 分 37 秒	137 度 76 分 85 秒	2024年 8月 15日 ～ 2024年 10月 28日	230 m ²	道路改良
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
大屋敷C古墳群 (C5号墳)	古墳	古墳時代		古墳 (円墳)		須恵器 土師器 瀬文土器 石器 鉄器	羨門立柱石下の SP01 から須恵器 坏蓋1点と土師器小碗1点が出 土し、古墳築造に伴い一括埋納 した可能性が高い。	
要 約	大屋敷C古墳群を構成する C5 号墳の発掘調査で、周溝外径 13.30m、墳丘径 9.70m の横穴式石室を埋葬施設とする円墳であることが判明した。石室は全室に近い状態で破壊されていたが、開口部から向かって右側の羨門立柱石のみが残っていた。羨門立柱石下から一括埋納された可能性が高い須恵器・土師器が出土し、遺物から7世紀後半の築造と考えられる。また、周溝上層土から鉄器が出土しており、戦中に軍事的施設として墳丘が転用されていた可能性も考えられる。							

大屋敷C古墳群2

2025 年 3 月 28 日

編集・発行機関	浜松市教育委員会 (浜松市市民部文化財課が補助執行)
---------	-------------------------------

印	刷	中部印刷株式会社
---	---	----------

Oyashiki-C Tumuli

The 3rd Excavation Report

A Report of Archaeological Investigation
in Western Shizuoka Prefecture, Japan



March, 2025

Hamamatsu Municipal Board of Education